

2020（令和2）年度

2日〔**〕

国語

注意

- 1 開始の合図があるまでは、開かないこと。試験時間は、六十分である。
- 2 問題は声を出して読まないこと。
- 3 問題用紙は二十六ページ、、の二題から成っている。
- 4 問題用紙および解答用紙に、落丁、乱丁、汚損あるいは印刷不鮮明の箇所などがある場合は、手をあげて監督者に申し出ること。ただし、**内容に関する質問は受けつけない。**
- 5 解答は必ず**鉛筆**を使用し、**解答用紙**に記入すること。
- 6 解答はすべてマーク式の解答欄①②…を丁寧に塗って解答すること。
- 7 訂正箇所は、消しゴムで完全に消すこと。
- 8 解答に関係のない符号（？レなど）や文字は記入しないこと。
- 9 解答用紙を折ったり、汚したりしないこと。

一 次の文章を読んで、後の問に答えなさい。

「都市の再生」を語ることの第一の困難は、「都市」そのものが、長らく「再生」されるべきものとしてよりも、「再生」を困難にするものとして、誘惑し、収奪し、支配するものとして理解されてきたことに由来している。歴史的にいうならば、多くの場合、都市は知識、騒音、富、野心、文明などの観念と結びつけられ、その対立概念は、平和、純朴、安楽、無知、後進性などと結びつけられる「田舎／農村」であった。たとえば、かつて都市は、自然に対して屹立する不遜な人間精神の表れと見なされてきた。^{注1}ゾンバルトは、都市的居住とは「自然に逆らう形の居住」で、「環境の自然的な」^(あきつり)対立する不遜な人間精神の表れと述べたのは、そのような意図からである。「物質的労働と精神的労働の最大の分業は都市と農村の分離である」と述べたマルクスの都市概念もまた、このような「農村」を収奪する他者としての「都市」という観念に立つものであった。

もっとも近代以前に遡るならば、この対立は必ずしも明瞭ではなかった。^{注2}レイモンド・ウィリアムズによれば、英語の *city* あるいはその先行語の古フランス語の *cité* は、ラテン語の *civitas* に由来するもので、この言葉は市民を意味する *civis* から派生した集合名詞であった。語義としては、今日的な意味での「都市」よりも「国民」のほうに近く、市民の集合体を広く指していたと考えられる。ローマ時代、城壁に囲まれた狭義の都市に相当する言葉は、*urban* の語源の *urbs* であった。しかし、諸々の変遷を経て一三世紀頃には、*city* は大聖堂のある大きな町のことを指すようになったという。それでも一六世紀まで、*city* はロンドンを指す言葉として使われることが多く、一般的に「農村」と対立させられていたわけではない。ようやく一七世紀以降、都市生活の比重の増大と相まって、「都市 *city*」は「田舎 *country*」と対立する概念として捉えられるようになる。

したがって、このような近代的認識図式^Aの周辺や外では、必ずしも「都市」と「田舎」が二項対立的にだけ捉えられてきたわけではない。たとえば、「村が今日の都人の血の水上であったと同時に、^{注3} 都是多くの田舎人の心の故郷であった」という柳田國男の名言は、都市と農村を対立的というよりも

I

なものとして捉える視点を示している。やや異なる観点から

ではあるが、ルイス・マンフォードやアンリ・ルフェーブルも、さまざまな情報やモノ、技能を持った人々が集積し、新たな知識や文化が産みだされていく交差点としての都市の役割を強調した。村にも市が立ち、祭りともなれば多くの行商人や芸人、他の村々の人々が集まってくる。そのような多数のヒトやモノ、情報や出来事が交換され、意味が増殖していく場面が常設化され、規模を拡大させていくと

II

に文化や商売が営まれる場所としての都市になるといわけだ。田舎に住まう人々からするならば、都市はハレの空間であり、都市の人々からするならば、田舎はみずからのルーツであった。

しかしながら、それでもなお近代の都市認識を枠づけてきたのは、基本的には「都市」と「農村」との対立構図である。都市は非農業人口の集住地として理解され、またしばしば行政的、軍事的な中枢^{注6}結節性を備えた場所であった。すでにマックス・ウェーバーは、都市を住民相互の相識関係を欠いた巨大の定住として定義しつつ、これに住民の非農業性（経済的規定）や要塞性（政治・軍事的規定）を重ねることで、こうした近代的都市概念を要約していた。このような議論の地平においては、「都市」とは、農村ないしは民俗社会に対置され、商工業者や知識人を含む非農業人口が高密度かつ大量に集住している空間を指すものと要約されよう。より構造的に述べるならば、若林幹夫が論じたように、「都市」とは一次的な共同体であるムラの外部に、それらのムラを媒介し、同時にムラに対して超越する審級として析出されてくる二次的な社会体である。都市のダイナミズムとは、このような二次性にもかかわらず、都市はなお一定の場所的な広がりを持ち、その中に定住していく人々の社会、すなわちマチを絶えず胚胎^{はいたい}してきたことに由来している。

しかし、このような「都市」の定義が一般化していく近代において、現実の社会で起きていたことは、都市が膨張して周辺農村を呑み込み、さらには都市的なもの、ルフェーブルのいう「都市の織り目」が国土や帝国、地球上の隅々にまで浸透していくことにより、「都市」と「農村」の境界自体がなし崩しになっていくような事態であった。近代における「都市化」とは、それまで「都市」とみなされた地域にますます人口が集積し、工業が勃興し、資本と知識、そして矛盾が積み重なっていくプロセスであったのとまったく同時に、そのような「都市」のエレメントが全社会空間に拡散し、全域化していく過程であった。このような「都市の爆発」を通じ、農村は都市に浸食され、ハイゴウされ、都市の末端的な機能を担わされていくことで地域

が育んできた伝統やアイデンティティを解体させられる。伝統的なムラにとつて、近代の都市化は脅威であり、しかし最後には自身もその Ⅲ な一部として組み込まれてしまつてつもない時代の圧力であつた。

このようなわけだから、「都市」を「再生」させる、あるいは「都市」を活性化し、発展させていこうとする企ては、概念的に考えるなら、常に「農村」や「地域」の記憶や継承されてきた文化をますます死に追いやつていくベクトルを内包することになる。あるいはこう言つてもいい。「都市」がそもそもムラないしは「田舎」の他者として、第一次的な社会体の外部に存立するものであるとするならば、その全域化は、都市そのものの基盤のなし崩し的な解体、都市的なるもの D の自己言及的な回路への閉塞をもたらさずにはいなかった。人々は近代という檻、その物質化された姿である都市の檻に閉じ込められ、その感受性や想像力、記憶の回路までも含めて外に出ていくことができなくなる。「都市の再生」という言説は、それ自体のなかに都市の近代的爆発によつて息の根を止められていった社会的基層の風景を忘却させる効果を含んでいるのではないか。少なくとも「再生」されるべきは、「都市」の側ではなく、都市によつて浸食され、掘り崩され、ずたずたにされていった自然と人々の関係や第一次的な社会の営みのほうなのではないか。——そのような疑問が、「都市」と「再生」という議論をめぐり、まずもつて生じるわけである。

しかも、「再生」というからには、そもそも都市が、少なくとも一度は死んでいなければならぬ。しかし、近代を通じて膨張し、増殖し続けてきた都市が、いったいいつ「死んだ」というのであろうか。今日でもなお都市は、グローバルに増殖と膨張を続けているように見える。都市は今日、抑制されるべき対象でこそあれ再生の対象とは考えられないのではないか。少なくとも地球規模では、人口学的、産業論的に、現代はなお「都市の爆発」の時代であつて、「都市の再生」の時代ではない。「都市の再生」が語れるのは、せいぜいヨーロッパや北米、日本のような国々にすぎないのではないか。そしてこれらの国々にあつても、地方都市はともかく、東京やロンドン、ニューヨークのような大都市はいまだに膨張を続けているようにも見える。時代の先端部分で都市の時代がすでに終わりがつあることが宣告されながらも、いくつかの世界都市の例に見られるように、「都市の再生」のための政策がもたらすのは、さらなるメガ・シティの圧倒的な支配でしかないのではないか。

このような困難にもかかわらず、なお「都市の再生」を語ることにイクバくかの意味があるとすれば、少なくとも前提として、現代における「都市の死」とは何かを検討されていなければならないはずである。もちろん、この問いへのひとつの回答は、近代の「都市化」と「工業化」を重ね、ポスト工業化社会における大都市からの工場の撤退、工業生産基地としての都市の終焉しゆうえんを指摘するものであろう。たしかに、今日のグローバリゼーションのなかでの産業や労働力の再配置により、日本やヨーロッパ、北米の多くの工業都市が衰退と空洞化、失業率の増大や先行きへの不安あえに喘いでいる。このような状況に対し、「都市の死と再生」という主張は、個別的には意義をもつ。しかし、都市化と工業化はけっしてイコールではあり得ず、むしろ近代都市の権力性や資本との結びつきからすれば、工業という要素はもともと必要不可欠なものですらない。したがって、ポスト工業化や情報化のなかで生じている諸傾向は、けっして「都市の死」を含蓄するとは限らない。

もう一つ、「都市」と「地域」を重ね、近代化や工業化、グローバル化のなかで活力を失ってしまった地域の伝統や社会基盤ウをダクカンウしていこうという視点がある。一言でいうならば、「ローカリティの復権」がこの場合のテーマとなる。このような方向での「都市再生」は、経済や金融、商業文化においてハイスピードで進行するグローバル化の諸傾向とは鋭く拮抗きっこうすることになろう。しかし、それならばなぜ「都市再生」ではなく、「地域再生」なり「生活再生」なりと直截ちよくせつに言わないのかという疑問も生じてくる。実のところ、「都市再生」というときの「都市」には、グローバル化のエージェントとしての「都市」と、ローカリティの場としての「都市」という、しばしば相反する立場の二つの「都市」が曖昧に包摂ちやくせつされているのである。

さらにいえば、「都市の死」は、都市の爆発、つまりグローバルな広がりをもった全域的都市化そのものによってもたらされていとも考えられる。社会のあらゆる空間が徹底して「都市」になってしまふことは、もはや「都市」が Y だといえなくもない。このような意味で、注8多木浩二は、「『都市』は、すでに消滅しているのに、いまだに存在していると思いいんんでいる虚妄かもしれない」と問う。今日のグローバル／ローカルな力は、これまでなら「都市」とは呼び得なかったようなところで強力に作動し始めている。たとえば多木が挙げるのは、空港の例である。地球全域に広がった空港のネットワークは、

どこの地の現実にも帰属しない世界性を形成している。それは、「これまでの都市の外部にあり、かつその成立が絶対的に関係性、つまり他のエアポートとのネットワークに依存していることから、このネットワーク自体がこれまでとは別種の次元に出現しつつある世界都市」のようだ。しかしこの「世界都市」は、**Z**において、厳密な意味での「都市」ではない。かつての都市が、ムラという共同体の外部に、それらを超越する審級として析出された二次的な社会体であったとするならば、空港にみられる「世界都市」は、そのような二次的な社会体のさらに外部に、それらを超越する三次的な存在として登場している。

(吉見俊哉「都市の死 文化の場所」による)

注

- 1 ゾンバルト——ドイツの経済学者・社会学者（一八六三〜一九四一年）。
- 2 レイモンド・ウィリアムズ——イギリスの小説家・批評家（一九二一〜一九八八年）。
- 3 柳田國男——日本の民俗学者（一八七五〜一九六二年）。
- 4 ルイス・マンフォード——アメリカの建築評論家・歴史家（一八九五〜一九九〇年）。
- 5 アンリ・ルフェーブ——フランスの社会学者・哲学者（一九〇一〜一九九一年）。
- 6 マックス・ウェーバー——ドイツの政治学者・社会学者・経済学者（一八六四〜一九二〇年）。
- 7 若林幹夫——日本の社会学者（一九六二年〜）。
- 8 多木浩二——日本の美術評論家・社会評論家（一九二八〜二〇一一年）。

問一 傍線部（ア）（ウ）のカタカナを漢字に改めた場合、それと同じ漢字を含む選択肢を次の各群の中からそれぞれ一つずつ選び、その番号を答えなさい。

（ア）ヘイゴウ

- 1 人口集中のヘイガイ
- 2 騒音をシャヘイする
- 3 駐車をヘイセツする
- 4 回路をヘイレツにつなぐ
- 5 フクヘイに負けを喫する

（イ）イクぱく

- 1 人生のキロに立つ
- 2 色紙にキゴウする
- 3 スウキな生涯を送る
- 4 多額のキフ金が集まる
- 5 解析キカ学を専攻する

（ウ）ダツカン

- 1 証人をカンモンする
- 2 アツカンの出来栄えだ
- 3 エイカンをつかみ取る
- 4 母がカンレキを迎える
- 5 カンゼンと立ち向かう

問二 傍線部(あ)・(い)の語句の本文中の意味として最も適当なものを次の選択肢の中からそれぞれ一つずつ選び、その番号を答えなさい。

(あ) 屹立する不遜な

- 1 恐れつつ手を加えようとする
- 2 摂理に逆らい破壊を志向した
- 3 立ち向かう思い上がった
- 4 支配を確立した誇らしい
- 5 立ちふさがっては跳ね返される

(い) ベクトルを内包する

- 1 指向から逃れられない
- 2 傾向を含み持っている
- 3 性質が必須要件となる
- 4 原因を隠し持っている
- 5 悪癖を必ず抱えている

問三 空欄

X

に入る表現として最も適当なものを次の選択肢の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

- 1 純朴さからくる価値を重んじ、等閑視する
- 2 美との調和を意図的に強調し、さんだつ篡奪する
- 3 再生を不可能にする介入を排除し、保護する
- 4 所与の諸条件を人為的に支配し、統御する
- 5 厳しい条件を受忍しつつ、結果的に支配する

問四

空欄

I

く

III

に入る語として最も適当なものを次の選択肢の中からそれぞれ一つずつ選び、その番号を答えなさい。なお、一つの語は一回しか用いてはならない。

- | | | | | | | | |
|---|-----|---|-----|---|-----|---|-----|
| 1 | 従属的 | 2 | 生得的 | 3 | 恒常的 | 4 | 一元的 |
| 5 | 逆説的 | 6 | 相補的 | 7 | 双極的 | 8 | 開放的 |

問五 傍線部 A 「近代的認識図式」とあるが、これに関する説明として適当でないものを次の選択肢の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

- 1 近代的認識図式には、「都市」は「田舎／農村」から何物かを奪い去る外部的存在だという基本的な観点がある
- 2 近代的認識図式の下では、「都市」は「田舎／農村」を基礎づける本質的な特徴とは相容れない存在であった
- 3 近代以前、「田舎／農村」という語と対立する概念として原初的に存在したのは、*city* ではなく *vills* という語であった
- 4 近代的認識への反証として、「田舎／農村」に様々なものが集積することで「都市」が生まれたという視点が歴史学者や哲学者から提出されている
- 5 近代以前、「都市」や「田舎／農村」に実際に住まう人々にとって、それぞれは相矛盾せず関連性を有するものであったといえることができる

問六 傍線部B このような「都市」の定義とあるが、ここで述べられている「都市」の定義として最も適当なものを以下の引用文も参考にして次の選択肢の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

「二次的 secondary」という言葉は、社会の他の領域の存在を一次的 primary な前提として、それらの間の交通諸関係の場として存在するという、都市が社会の他の領域にたいしてもつ位相を表現する言葉として用いられている。都市が二次的定住であることの対として、都市がそれらにたいして媒介的（＝二次的）な位相をとる社会の他の領域を、「二次的な位相にある社会」ないし「一次的領域」と呼ぶことにしたい。二次的定住という概念は、都市が、社会の他の領域を一次的領域とする、二次的な位相をもった定住であるということの意味している。

（若林幹夫『熱い都市 冷たい都市』による）

- 1 行政・軍事・商工業などに従事するお互いをよく見知っていない人々が高密かつ大量に集積した空間で、農業社会に存在した規範の代わりに、自然発生的に政治・軍事的規定が生じている場所
- 2 農村の外部にある大規模な人口集積地で、商工業者や知識人のように、非農業従事者集団であることを根拠に都市を農村よりも超越した存在と規定しようとする人々を高密かつ大量に含んでいる場所
- 3 非農業従事者が集積しており、行政・軍事・商工業など既存の一次的共同体にはない機能を備えた空間であるが、一次的領域の存在を前提としている点で、人間社会の単位としては複合的なものとみなされる場所
- 4 非農業従事者の人口集積により既存の血縁的・地縁的集団とは異なる領域に出現した空間で、それら一次的集団相互の仲立ちをする存在であると同時に、民俗文化とは異なる社会が構成されている場所
- 5 農村の外部にあつて農村相互を媒介し、農村とは異なる種々の機能を有している場所であると同時に、その場所的な広がりを膨張させ、周辺にある一次的領域を呑み込もうとする傾向を備えた場所

問七 傍線部C 近代の都市化とあるが、その説明として最も適当なものを次の選択肢の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

- 1 工業化の進展によって非農業従事者となったものが都市に流入することで、農村との両立がますます進むこと
- 2 都市に特徴的な種々の要素を非都市空間へと広げていくと同時に、人口集積と領域的な拡大も続いていくこと
- 3 都市と呼ばれる領域が爆発的に拡大して周辺の農村を吸収しつつ、都市と非都市の文化的特徴を残していくこと
- 4 人口の集積や工業の発達など、都市を特徴づけるものが明らかになり、農村との対立が明確になっていくこと
- 5 都市が、内部に矛盾を集積させ過ぎたために、農村の独自性や特徴の解体を企図する存在になってしまうこと

問八 傍線部D 都市的なるものの自己言及的な回路への閉塞とあるが、その説明として適当でないものを次の選択肢の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

- 1 人々が、物質的にも精神的にも近代化や都市という枠にとらわれてしまうこと
- 2 都市に求められるものは再生ではなくむしろ抑制であるという議論も惹起じやっきすること
- 3 田舎の伝統やアイデンティティ、社会的基層の風景を記憶にとどめ大事にすること
- 4 都市を再生しようとする企てそのものが、都市の存立基盤を失わせてしまうこと
- 5 自然と人々の関係や第一次的な社会の営みの重要性が生じること

問九 傍線部E「都市の再生」を語ることとあるが、これについての説明として適当でないものを次の選択肢の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

- 1 「都市の再生」などと言うが、そもそも都市は死んでおらず、再生されるべきものは都市が蹂躪した一次的な共同体のほうではないかとする考えもある
- 2 「都市の再生」について語る前に、「都市の死」とはどういった状況なのか、また、再生される「都市」とは何なのかを検討する必要がある
- 3 工業都市という個別事例だけを対象にするのであれば、ポスト工業化時代の都市の衰退と空洞化を「都市の死」と呼ぶことは不可能ではない
- 4 活力を失った地域の伝統や社会基盤を、グローバル化の傾向と足並みを揃えつつ取り戻していこうとする方向での「都市の再生」論議は有益である
- 5 「都市」の概念が相矛盾するものを含んでいるために、「都市の再生」という問題設定がそもそもおかしいのではないかという疑義も生じてしまう

問十 次の a ～ f の表現のうち、空欄 ・ に入るものの組み合わせとして最も適当なものを次の選択肢の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

- a その固有性を失い、拡散し消失していくこと
- b 周辺一次領域の非存在や機能面で限定的である点
- c 「死」を迎えつつあるなどとは無理解の極み
- d 人口集積地でない点や場所的な広がり非確定性
- e 地域との結びつきの完全なる欠如や無定住性など
- f 既存の一次的領域を完全に浸食してしまうこと

1	Y		a	Z		d
2	Y		a	Z		e
3	Y		c	Z		b
4	Y		c	Z		d
5	Y		f	Z		b
6	Y		f	Z		e

問十一 本文の内容と合致するものを、次の選択肢の中から二つを選び、その番号を答えなさい。

- 1 都市は再生の対象なのか、そもそも再生が必要なのかという「都市の再生」を語るにあたっての前提が議論され尽くしたとは言い難い
- 2 都市と農村が有史以来一貫して二項対立的な存在と認識されてしまうのは、都市が農村を呑み込もうとするダイナミズムに起因している
- 3 近代という檻を物質的に具現化したのが都市の檻であり、これは城壁に囲まれたローマ時代の都市に由来するものである
- 4 「都市再生」ではなく、地域や生活を再生すべきという議論がある一方で、「地域」「生活」という概念が正しく定義されていない
- 5 「都市」は、全地球的な方向へ拡散していく傾向を持つ存在でありながら、同時に地域的なものの存在が基礎にあるという二重性を持つ
- 6 三次的存在がネットワークに依拠するものであるなら、インターネットを介した個人間のつながりもまた、三次的な世界存在といえる

二

次の文章を読んで、後の問に答えなさい。

庶民的なレベルでの正義や悪の基準など、I、皆共通だろう、と言われそうだが、たとえば『平家物語』で断罪

されている平家、すなわち平清盛の「悪」とは、天皇家、神仏、民衆（と言っても九州や北海道の住民は関係なく、京都の町の人々）に逆らったことにあった。後白河法皇と再三対立し、奈良の東大寺の大仏を焼き、都を福原に遷したという、現在では既成の権力を抑えて甲としたと高く評価されるこの三点が、いずれも『平家物語』では乙悪事として描かれている。江戸時代末期の馬琴の場合、この三条件、特に天皇へのキョウジュンは正義や悪の基準としてもちろん否定はされないまでもそれほど強調されておらず、現代の感覚とあまり変わりがないものになっている。

なお「正義」の語は江戸時代以前の文献でも見え、なかには今日と近い用例もあるが、一般的な感覚としては、むしろ馬琴が八犬士に象徴させた「仁、義、忠、孝、礼、智、信、悌」や儒教が人間の守るべき徳目として説く五常「仁、義、礼、智、信」などで、このなかの「義」だけに代表させるとやや違和感が残る。また朱子学で「ものごとのあるべき姿」をさす「理」の語なども「正義」と似た意味で使用されることがある。

ところで馬琴が読本の制作にあたって、歌舞伎や浄瑠璃といった江戸時代の演劇に大きな影響を受けていることは、既に指摘されている。今回、私が注目したのは、そのなかでも特に目につく「ぬれぎぬ」という設定である。「ぬれぎぬ」の語は九州の博多にある濡衣塚にまつわる、継母に罪をきせられて殺された娘の話が起源で、無実の罪、冤罪を意味することばとして江戸時代にも使われている。いわば正義がたぬかれなかつた場合を意味するこの状況が、さまざまな文学にどう表現されたかを知ること、正義が何であるのかを逆に浮かび上がらせたい。

歌舞伎が好きな人なら誰でも知っているように、江戸時代の演劇には「無実の人がぬれぎぬをきる」話がやたらと多い。石を投げて犬が歩いても「ぬれぎぬ」にあたるのではないかと思うくらいで、この設定が皆無の演劇を探す方がむしろ難しい。これまた、特に江戸時代でなくてもI、文学にぬれぎぬという設定は欠かせないのではないかという指摘もある

う。シェイクスピアの演劇でも、現代小説でも、いくらでも例があげられるからだ。山本周五郎の文学などは、その名作のほとんどが、どこかで「ぬれぎぬ」というテーマと関わっており、この作家を読む時のキーワードにしてもいいのではないかと
思うほどだ。《 a 》

そもそも、多くの読者が好感を抱くような健全でまっとうな市民なら、法を犯して追われたり投獄されたりすることは本来
ないはずなので、そのような人物に危険を冒し冒険をさせるためには、無実の罪をさせる他ないというのは、文学作品の手法
としてやむをえない事情でもある。

だが、あらゆる時代のあらゆる文学作品に「ぬれぎぬ」が登場しているわけではない。さすがに人類すべての罪を贖つて死
んだと言われるキリストだけに、聖書やその影響を強く受ける騎士物語には「ぬれぎぬ」設定が目につくものの、ギリシャ神
話や日本神話にはそれほど明確な「ぬれぎぬ」は登場しないし、『源氏物語』や『平家物語』にもこのような設定が印象的な
場面を作ることはない。「ぬれぎぬ」が登場するのは、やはりある程度特定の時代や社会や作家に限られている。《 b 》

授業で学生たちに「ぬれぎぬ」に対する印象を聞くと、誰もが拒否感や嫌悪感しか抱いていない。現実の冤罪事件の数々を
見ても、それは当然の健全な感覚だろう。だがそれなら、これだけ多くの文学に「ぬれぎぬ」が登場する理由は何なのか。怖
いもの見たさ、悪へのあこがれというだけでは説明できない魅力が何かあるのではないか。

それを探るため、江戸時代の歌舞伎を中心に、さまざまな文学に登場する「ぬれぎぬ」を、三つの形式に分類してみたこと
がある。まったく身に覚えのない罪を突然させられて犯人扱いされ、呆然とする「予期せぬぬれぎぬ」、周囲や誰かの幸福の
ために、あえて自分が犯してもいない罪を犯したとして、あらゆる誹謗中傷や攻撃に耐えて悪人のふりをしてみせる「覚悟の
ぬれぎぬ」、無実の罪をさせられた、あるいは常々周囲から悪人として扱われていた怒りや誇りから、自分が犯してもいない
罪をあえて犯したと言ってしまう「怒りのぬれぎぬ」、の三つである。《 c 》

たとえば『仮名手本忠臣蔵』で、義士の一人で現在は妻の実家に帰って獵師になっている早野勘平は、闇に包まれた街道で
猪と間違えて撃ち殺したのが舅だと思ひ込み、姉や盟友に責められて思い余って自害する。だがその直後、彼が殺したのは

実は舅を殺した強盗だったとわかり、謝罪する姑と仇討ちの連判状に加えると約束する盟友たちに囲まれ、彼は笑って死んでいく。観客はその直前に強盗による舅の凄惨な殺害場面を見ていることもあって、舅殺しという罪を自分が犯したと思ひ込み、それを愛する人々に責められて苦悩し孤立し絶望する若く美しい男の哀れさを痛感する。《 d 》

また『菅原伝授手習鑑』では、三人兄弟の長男で、第二人とは敵対する立場の主君に仕える松王は、菅原道真の幼い息子をかくまっていた旧臣に、少年の首を要求する。せっぱつまった旧臣は懊悩の末、別の少年を殺し、その首を差し出すと松王は納得して帰るのだが、後に殺された少年は松王の息子で身代わりのため松王自身がさしむけたことがわかる。筋を紹介しただけではいろいろな人が批判しているように何とも陰惨な話だが、圧倒的な権力を持つ悪の支配者によって正義が圧殺されるなか、最後の抵抗として道真の息子を守ろうとする正義の側の人々が、そのような非人間的な行動をとってまでとるべき道をそれぞれに選択した姿は、長い年月を経てⁱチヨウタクされたⁱⁱ巧みな演出と演技によってⁱⁱⁱ否応なく観客の胸に迫る。先の勘平の場合と異なりこの劇では観客もまた、他の登場人物と同様、松王を恐ろしい悪の権化と認識しているから、最後に彼の父親としての苦悩が語られる時、彼が耐えていた孤独の深さに圧倒される。

さらに、『義経千本桜』では、不良青年として親にも見放されていた若者権太が、老親がかくまっていたかつての主君の一家を金目当てで役人に売り渡す。老父がたまらず自らの手で彼を刺し殺すと、苦しい息の下から権太は、売り渡したのは実は自分の妻子で主君の一家は無事に逃がしたことを告げ、後悔して詫びる老父母に抱かれて笑って死ぬ。《 e 》

勘平の場合、彼自身も自分が舅を殺したと思ひ込んでいること、死者の財布を盗んだという弱点を持つこと、また周囲の画策や誰かの悪意によるのではなく不幸な偶然が重なった結果であることなどは、本人が潔白なのに悪意によって罪をきせられるシェイクスピア『オセロー』のヒロイン、デユマ『モンテ・クリスト伯』やルー・ウォーレス『ベン・ハー』の主人公のような **II** な「予期せぬぬれぎぬ」とは異なる。しかし、これらの作品の設定に共通する、無邪気で無垢で正義を信じてきつていた人物が、まったく予想していなかった誤解に無防備に蹂躪される姿が、読者や観客に深い同情を感じさせ、あえて言うなら一種の嗜虐的な快感さえ生む点では共通する。

また権太の場合は松王の場合と区別がつけにくいが、下村湖人『次郎物語』の次郎が、母親に疑われたため壊してもいない祖父の算盤そろばんを壊したと告白したり、かつてフランスへの抵抗運動に加わっていたアルジェリアの女子学生ジャミラ・ブーパシヤがテロリストの疑いをかけられて拷問され、「お望みなら全部の爆弾」を投じたと自白して警官たちの更なる怒りを持ったように（ジゼル・アリミ、シモース・ド・ボーヴォワール『ジャミラよ朝は近い』）、「怒りのぬれぎぬ」の場合は自分と相手や周囲に対する

X

の要素が強い。

両者ともそれぞれに用例は多く、さまざまな私たちの日常の心理や社会現象に関わって語ることは尽きないのだが、正義との関連において当面注目しておきたいのは、二番目にあげた「覚悟のぬれぎぬ」である。

先に「ぬれぎぬ」に関する学生たちの印象がおおむね否定的であると述べた。同様にこの「覚悟のぬれぎぬ」で多くの人が連想するのは、暴力団も含めた大きな組織で上司の罪をきて下部の人が服役したり自殺したりする陰鬱で許しがたい事例だろう。だが一方で先にあげたキリストの場合に

II

のように、他者のために自分が汚名をきて、そのことよって与え

られるすべての侮辱や攻撃を甘受するという「覚悟のぬれぎぬ」は、時に建設的iiiで崇高なものにも成り得る。最も個人的な恋愛の場合ですら、先の「モドリ」と同様に歌舞伎の世界で「愛想づかし」と名づけられて定番となっている場面では、愛する相手の幸福ゆえにわざと自分の愛がさめたか元からなかったかのようにふるまい、怒り悲しむ相手から恨まれ罵られ暴力を受けても態度を変えない人物が登場する（これもまたデュマ・フィス『椿姫』に見るように、日本や江戸時代に限られたことではない）。

このような場合、裏切られた、冷たい、と怒る相手のその怒りこそが自分に対する愛の強さの証明であるから、「愛想づかし」をする本人には一種の倒錯し屈折した喜びもどこかにかすかにあるかもしれない。だが最も純粋なたちでの「覚悟のぬれぎぬ」は、そのような感情さえも生まないだろう。

芥川龍之介『奉教人の死』で、他者の罪をきる主人公は自分が誰のために犠牲になっているのかさえ関心がないかに見える。「覚悟のぬれぎぬ」の場合、他者や周囲のために自らが耐えて汚名にあまんじる主人公は時として、自分が罪を引き受けて幸

福にしてやる人々の顔や名前さえ知らない。

前に述べたように山本周五郎は「覚悟のぬれぎぬ」をきて人々を幸福にする人物を、あらゆるかたちで描いている。なかでも出色なのは「わたくしです物語」（新潮文庫『町奉行日記』所収）で、江戸時代のある藩で何か事件や不祥事が起こるたびに、「わたくしです」と名乗り出て罪をきる若い家臣が主人公だ。どの事件でも彼は真犯人が誰なのか、まったく知らないし知ろうともしない。あるいはそれほど力を注いで書かれたのではないかもしれない、のどかで明るいいこの作品は、「覚悟のぬれぎぬ」の本質とその豊かな可能性を実に鮮やかに示してくれる。

言うまでもなく三つの「ぬれぎぬ」はすべて、正義とは対極にある。特に「覚悟のぬれぎぬ」は公的な正義の審判を拒否した人たちの物語であり、正義を希求し、その実現に向かって努力する人たちの Ⅲ だろう。それでも歌舞伎や浄瑠璃は江戸時代から今日まで根強い人気を保ち、山本周五郎の小説は国民文学と言ってよいほど愛読者が多い。

D これらの作品が私たちに与える喜びとは何なのだろう。「ぬれぎぬ」があまり文学に登場しなかった時代もあるように、いつかそのうち、このような文学が人々に理解されずすたれていくこともあるのだろうか。

学生たちの「ぬれぎぬ」に対する完全な否定を見るたび私は少し不安になる。もとより冤罪は再審理されなければならないし、歴史的に汚名をきせられた国や組織や人間は名誉回復されなければならない。誤解することもさされることもなく正義と真実が誰の目にも明らかになるように、私たちは日夜たゆまぬ努力をしなければならない。

しかし、それと同様に重要なのは、明白になった真実、調査を重ねて疑う余地のなくなった正義と悪、異なる立場や価値観を語り合って到達した一致点があるからと言って、それ以外の闇に埋もれた真実、消された事実、切り捨てられた観点、隠された正義と悪がまったく存在しないと決めつけてはならないということではないだろうか。

それは「何が正しいかわからない」とあきらめてしまうことなのではない。全力をふりしぼって白黒をつけ、正しいと判断したことを選択し、他者と合意できる一致点を模索することに怠惰であったり臆病であったりしてはならない。だが、どんなに力をつくしても、なおかつ葬られ沈黙し消えていった正義や真実はあり得る。「ぬれぎぬ」を嫌悪し否定することは、その

事実から目をそむけることにつながりかねない。

それはまた、昨今ではあらゆる場所で実施されている「評価」という作業への抵抗のなさ、疑いのなさとも重なっている。「覚悟のぬれぎぬ」は、正しく評価されることを拒んだ人々の物語でもあるのだが、それに共感しキョウメイする土壌は私たちひとりひとりの内部や外部に、いつまで、どれだけ残っているのだろうか？ それを失ってあまりある、それに代わる何かを私たちは手にすることができののだろうか？

（板坂耀子「歌舞伎にみる『ぬれぎぬ』の話」による）

注 八犬士——江戸時代後期の読本作家である曲亭馬琴（一七六七—一八四八年）の作品『南総里見八犬伝』の中の八人の登場人物。

問一 傍線部(ア) (ウ) のカタカナを漢字に改めた場合、それと同じ漢字を含む選択肢を次の各群の中からそれぞれ一つずつ選び、その番号を答えなさい。

(ア) キヨウジュン

- 1 歯のキヨウセイ
- 2 キヨウネン八十七歳
- 3 キヨウイの粘り
- 4 キヨウガ新年
- 5 メイキヨウ止水

(イ) チョウタク

- 1 セイチョウな山の空気
- 2 ウチヨウテンになる
- 3 ブロンズのチョウゾウ
- 4 敵をチョウハツする
- 5 チョウモン客に対応する

(ウ) キヨウメイ

- 1 大山メイドウして鼠ねずみ一匹
- 2 人事を尽くしてテンメイを待つ
- 3 失敗の教訓を心にメイキする
- 4 門松はメイドの旅の一里塚
- 5 深夜の騒音はメイワク千万だ

問二 空欄 I III に入る言葉として最も適当なものを次の各群の選択肢の中からそれぞれ一つずつ選び、

その番号を答えなさい。なお、二ヶ所ある I ・ II にはそれぞれ同じ言葉が入る。

I 1 東奔西走

2 古今東西

3 南船北馬

4 東夷西戎
とういせいじゆう

5 東行西走

II 1 叙事的

2 意図的

3 究極的

4 象徴的

5 典型的

III 1 流れに棹さおさす

2 神経を逆なですする

3 揚げ足をとる

4 顔が立つ

5 立つ瀬がない

問三 本文中の《 a 》《 e 》のうち、次の一文を入れる箇所として最も適当なものを次の選択肢の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

このように悪人と思われていた人物が、実はそうではなかったという長い告白をする場面は「モドリ」という名称で呼ばれるほど江戸の演劇では定番になっている。

- 1 《 a 》
- 2 《 b 》
- 3 《 c 》
- 4 《 d 》
- 5 《 e 》

問四 空欄

X

に入る言葉として最も適当なものを次の選択肢の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

- 1 絶望や抗議
- 2 失笑や嘲笑
- 3 懐疑と誤解
- 4 憤怒かんぬと後悔
- 5 焦燥と困惑

問五 空欄 甲 ・ 乙 に入る言葉の組み合わせとして最も適当なものを次の選択肢の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

- | | |
|--------------|-----------|
| 甲 | 乙 |
| 1 町民の地位を高めよう | ぬれぎぬを象徴する |
| 2 清らかな政治を行おう | 滅びの理由となった |
| 3 新しい王朝を開こう | ぬれぎぬを象徴する |
| 4 ぬれぎぬを着せよう | 滅びの理由となった |
| 5 宗教の権威を高めよう | 滅びの理由となった |

問六 傍線部 A 「ぬれぎぬ」という設定 とあるが、この設定についての筆者の基本的な考えとして最も適当なものを次の選択肢の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

- 1 古典的な小説でも現代小説でも、読者の最も関心のあるキーワードとなっている
- 2 より多くの読者をとりにする手法として、文学創作上欠かせないものである
- 3 正義がたらぬかれない状況を通して正義とは何かを考えなくてはならなくなる
- 4 非日常的な行為を読者に疑似体験させることで健全な社会が維持されている
- 5 文学の主題として、洋の東西を問わず長らく拒否や嫌悪の対象として扱われてきた

問七 傍線部 B 一種の嗜虐的な快感 とあるが、これはどのようなことを意味しているか。その説明として最も適当なものを次の選択肢の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

- 1 読者や観客は、登場人物が無慈悲に苦しむ姿に深く共感しながらもその設定自体を楽しめるということ
- 2 設定が読者や観客の状況に類似しているため、残酷な方法で殺される主人公に共感できるということ
- 3 読者や観客の現実に起こりうるため、無意識に自らの状況に置き換えて考えてしまうということ
- 4 読者や観客は、無残に死んでいく登場人物にまったく肩入れすることなく臨めるということ
- 5 読者や観客は、自分の経験や体験と照らし合わせながら演劇作品の主題を楽しめるということ

問八 傍線部 C その豊かな可能性 とあるが、本文中の二重傍線部 i ~ v のうち、この「豊かな可能性」を表現している言葉として最も適当なものを次の選択肢の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

- 1 あらゆる誹謗中傷や攻撃に耐えて悪人のふりをしてみせる
- 2 巧みな演出と演技によって否応なく観客の胸に迫る
- 3 建設的で崇高なものにも成り得る
- 4 誤解することもされることもなく正義と真実が誰の目にも明らかになる
- 5 「何が正しいかわからない」とあきらめてしまう

問九 傍線部D これらの作品が私たちに与える喜びとは何なのだろうとあるが、この「喜び」についての筆者の考えの説明として最も適当なものを次の選択肢の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

- 1 何が正義で何が悪かを一刀両断することで読者や観客に生きていく上での倫理観や道しるべを気づかせてくれること
- 2 ふだん意識しないぬれぎぬを考えるきっかけとなり、今まで歩んできた人生を見つめ直し自省できるようになること
- 3 読者や観客にとってフィクションであるぬれぎぬは、正義や悪についての再考を促すだけでなく精神的緊張を解消する最良の手段となること
- 4 ぬれぎぬは読者や観客にとっては嫌悪し否定したいものなので、ぬれぎぬという事態を凝視することで、自分の振る舞いを修正できるきっかけとなること
- 5 正義を見つけ悪を断罪することも大切だが、一方で表面化せず闇に埋もれ隠れたまま忘れられる事実もあることに気づかせてくれること

問十 本文の内容と合致するものを、次の選択肢の中から二つを選び、その番号を答えなさい。

- 1 「正義」という語は江戸時代以前の文献にも見られ、現在の意味・用法と同じであることがわかる
- 2 馬琴にとって正義はぬれぎぬを晴らすことであり、そのために歌舞伎や浄瑠璃を参考に作品を書き続けた
- 3 「ぬれぎぬ」は現実のものとしては受け入れがたいが、文学の主題としては楽しめるものである
- 4 『菅原伝授手習鑑』は、ぬれぎぬの三つの形式の中では「覚悟のぬれぎぬ」に分類されるものである
- 5 「覚悟のぬれぎぬ」は愛の強さを証明するための主題として筆者が注目している
- 6 「覚悟のぬれぎぬ」は正しく評価されることを望んだ人々の物語としてこれからも読者や観客を魅了するだろう

国語解答用紙 2日 [**]

一

問一	(ア)	① ② ● ③ ④ ⑤
	(イ)	① ② ③ ④ ● ⑤
	(ウ)	① ② ③ ④ ● ⑤

問二	(あ)	① ② ③ ● ④ ⑤
	(い)	① ② ● ③ ④ ⑤
	問三	① ② ● ③ ④ ⑤

問四	I	① ② ③ ④ ⑤ ● ⑦ ⑧
	II	① ② ③ ● ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧
	III	① ● ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧

問五	問六	① ② ● ③ ④ ⑤
	問七	① ● ② ③ ④ ⑤

問八	問九	① ② ③ ● ④ ⑤
	問十	① ② ● ③ ④ ⑤ ⑥

問十一	● ② ③ ④ ⑤ ● ⑥
-----	------------------------------

二

問一	(ア)	① ② ③ ④ ● ⑤
	(イ)	① ② ③ ● ④ ⑤
	(ウ)	① ● ② ③ ④ ⑤

問二	I	① ② ● ③ ④ ⑤
	II	① ② ③ ④ ● ⑤
	III	① ● ② ③ ④ ⑤

問三	問四	① ② ③ ④ ● ⑤
----	----	-------------------------

問五	① ② ● ③ ④ ⑤
----	-------------------------

問六	問七	① ② ● ③ ④ ⑤
	問八	① ② ③ ● ④ ⑤

問九	問十	① ② ③ ● ④ ⑤ ● ⑥
----	----	--------------------------------

50点

50点